

「赤との混色」

葉月雨音十岡和田晃

真つ白なキャンバスへ色鮮やかなパレットから色を移す。赤を、青を、黄を移していく。鮮やかな色の次は、淡い色。茜を重ね、蒼を加え、橙を混ぜていく。そうやって望む形を、質感を、表現するに相応しい色を探していく……。

絵を描くことが好きなわけではない。ただ描きたい「もの」があるから筆を動かしているだけ。大学へも、その「もの」を表現するやり方が知りたいから来ているだけ。

咳き込む。どうにも体調がよくない。妙に身体が重いのだ。もう何年もこの状態が続いているが、いっこうに慣れない。

不意に、ノックの音が響く。

教室の扉に寄り掛かり、こちらを覗く教授の姿があった。

「熱心にやっていると、申し訳ないね」

表情からは申し訳なさよりも呆れたような感情が読み取れた。事務的にいいえと返すと、教授は諭すように続けた。

1 「残って描いているのは構わないが、もう夜間部の時間だ。まだ続けるようなら邪魔に

2
ならないよう、隅でやりたまえ。最近は大質者が大学をうろついているという話もある
ようだから、早く帰ったほうがいいぞ」

それだけ言うと教授はそそくさと帰っていった。声をかけられて気づいたが、随分と
絵に没頭していたらしい。描き始めたときにはまだ明るかった外が、もう真つ暗だ。

だがここで一旦やめて家へ帰るには切りが悪い。夜間部の学生達には申し訳ないが、
このまま教室の一部を借りて続きを描いてしまおうと思い、指示されたとおりに教室の隅
へと移動した。

我に返った。頭がふらつく。

いちど描き始めると、夢中になって止まらないのだ。これ以上イーゼルに向つてい
は倒れてしまう。一段落ついたと言えるところまで描けたし、もう帰ろう。そう思い、
音を立てぬよう気をつけながら筆を片付け、まだ作業している夜間部の学生たちを後目
に教室を後にした。

教室を出ると、月明かりが廊下を照らしていた。まだ満ちておらず、街灯も必要最低
限しか点いていない。そんな心許ない明かりの下で歩いていると、まだ幼かった頃に実
家の倉庫で遊んでいたことを思い出す。

実家は先祖代々継いできた古い家で、その倉庫も家ほどではないが古いものだ。倉庫は元々、アトリエだったという。持ち主は何代も前の先祖の誰か、ということしかわからない。素性は知れず、突如行方をくらませた人らしく、その人がいつ戻ってきてほしいようにと、当時の家族がアトリエをそのまま残していたという話だ。それが時代を経るにつれ、倉庫として使われるようになり、アトリエだった面影は少しずつ失われていった。

だから倉庫には色々なものがあり、子供の好奇心を満たすには十分な遊び場だった。絵を描き始めるきっかけとなった作品を見つけたのも、そんな倉庫で遊んでいたときだ。倉庫の中でも人目を憚るようにひっそりと置かれていたその絵は、ある人物を描いたものだった。男性だったのか女性だったのかは今でもわからない。中性的で、そう、綺麗な人であった。家族に聞いたところ、誰もその絵を知らなかった。ずっと置かれていたはずなのに、見たこともないと言うのだ。親戚でさえも、わからなかった。おそらく、アトリエとして使っていた人が描いたものだろう。それ以上は、あたかも記憶に霧がかかったかのように、誰も教えてくれなかった。まるで触れてはいけないことのように。

封印された記憶が不意に蘇る。

確かに、絵のなかのその人と目が合った。

生気が宿ったかのようだ。そう、微かに。

あんなにも心を奪われたのは、後にも先にもその時だけだ。まるで初めて恋に落ちた少女のように、その絵のことだけを考え、暇さえあれば眺めていた。

何もしていかないのに、だんだんと体重が落ちていった。頬はこけ、目の下には隈ができて、それを隠すため、慣れない化粧をする羽目になった。それでも、少しずつ体重は減っていた。

あの人は化粧なんて無くても、そのままで綺麗なのに。

絵に話かける様子を見ていた周りの大人たちは、あの絵に魅入られただの、いや単に頭がおかしくなったのだの、好き勝手に言い放ち、あの絵を恐れていた。畏怖するあまり絵を燃やしてしまうほどに。

魅入られたというのは、今でも否定は出来ない。あの絵があつたから、こちらの世界——日常ならざる世界へと来てしまったのだから。

そんなことを思い出しながら歩いてみると、前から来ていた人に気づかず、ぶつかってしまった。

「ごめんなさい」

すぐに謝罪の言葉を述べ、頭を軽く下げた。頭を上げて、ぶつかってしまった相手を見やる。

——なんて美しい人。

その人を見たとき、素直にそう思った。化粧などで人工的に造られる美とは違う。赤みがかかった黒い目と色素の薄い髪。常人離れしているようにも思えるが、違和感を抱かせない不思議な雰囲気。

ぼんやりとあれこれ考えていたら、天使のような顔立ちをしたその人は、こちらに一礼すると歩き去ってしまった。

後姿が惜しくて、想い人を見つめるように眺めてしまった。

数週間後。

あの日から何度か、夜間部の時間まで学校に残っていることがあったが、あの人に会うどころか、見かけることすらなくなった。

実在する人物なのだろうか。夢と現実とが、絵の具のようにごちゃ混ぜになっているのではないだろうか。

そんな、ある日。

自分の記憶に信が置けなくなっていた夜、キャンパスへの道を急いでいた。あの人に
出会った時間よりも、もっと深く暗い、そんな時間。不安に駆られる。なぜこんな時間
に脚が向かうのかわからない。それなのに不安に駆られる。

まるで、何かに操られているように。

ふと、急ぐ足を止める。今まで自分を襲っていた脅迫の念が消えている。ならば家へ
と帰ろう。用事など無いのだから。

ポト……。

物音がした。

ポトリ……

水音のようだ。

続いて、小さな悲鳴。何か倒れる音。

それらはすべて、すぐそばの路地裏から聞こえた。周りに人はおらず、きつと物音も
悲鳴も、聞いたのは自分だけ。このまま帰ればきつと誰にも気にされず、見過されてし
まうだろう。だってそこはただ、道があるだけの路地裏。誰も気にすることはない。

意を決した。

正義感ではなく、純粹な好奇心。下世話な野次馬根性だ。

路地裏に近づくたび、大きくなる不安。

嫌な予感がする。自分のすべてが変わってしまうような感触。あの絵が燃やされた悪夢を、一時期よく見たものだが、あえて言ううとそれに近い。

やめておけばよかった。引き返せばよかった。

好奇心は猫を殺す、と諺に言う。その通りだ。だが、三つ子の魂百まで、虎穴に入らずんば虎兇を得ず、とも言うではないか。好奇心旺盛なのは子供の頃からだ。仮に選択をやり直せたとしても、変わらないだろう。

——後悔してもかまわない。

街灯など何処にもなく、真つ暗なはずだった。銀白色の満月だけが、“それ”を照らしていた。恐ろしいほどの壮麗さ。月明かりに照らされた“それ”は、ペンキをぶちまけたように広がるアかの中にあつた。そのアかは未だに広がり続けている。アかが足元まで流れて、靴を汚すのを見てしまったらもう、気づかぬフリは出来ない。独特な鉄臭さを無視することは出来ない。アかの中にある“それ”が物言わぬ死体であることも。

死体は人間大の大きさだった。だが人であるならば持つはずのない鉤爪や牙、獣の耳を持つていた。

そんな死体の傍らに誰かがいる。あの人だ。一人、死体の傍らに立っている。全身を血で染めながら。

ここに生きているものは、自分とその人だけ。

これは本当に現実か。夢なんじゃないだろうか。駄目だ。頭が混乱する。思考がまとまらない。

しくじったか、と呟いて顔をしかめる。牙を生やし、口元が血で汚れていた。死体にはまるで、牙で噛み付かれたような傷跡がある。

——まるで、吸血鬼のよう。

まともに働かない頭で、ふと考えた

不意に、金縛りが解けた。生存の本能が勝つたのだ。

あれは何だ。吸血鬼なら、次にエサとされるのは自分ではないか。冗談じゃない。エサにされるのはごめんだ。死にたく無い。

まだあの人をやったという確証は無い。それに襲って来てもいない。しかしあんな状況を見て、逃げ出さないやつはいないだろう。

——逃げろ。脳が命令する。
走れ、早く、駆ける、逃げろ！！

追いつかれた。もう無理だ。逃げることなんて出来ない。袋小路に入ってしまった。まるでB級映画だ。

「まあ、ひとまず落ち着いてくれよ。私は君を襲う気はないんだ」声が聞こえる。

見た目に反したフランクな話し方をするんだな、と冷静になりきれない自分にツッコミを入れてしまう。

「こんなところで話すのはなんだ。どこか人気の無い、落ち着いた場所に移ろうではないかね」

そう、人間ではない者——“吸血鬼”は続ける。

「だが、生憎、私は流浪の身でね。諸般の事情で、大事な寝所を失ってしまった」

芝居がかった仕草と共にそう問いかける。問いかけの形をとってはいるが、こちらの回答など肯定以外認めない押し付けがましさがある。にもかかわらず、話しぶりに嬉しさやにじみ出ている。馴れ馴れしい。そんな吸血鬼のご機嫌な様子に嫌な予感がある。

こちらのそんな思いなどお構いなしに目の前の存在は告げる。

待ちきれないと、チャンスを得たと言わんばかりに。

「私を君の家へ招いてもらおうか」

吸血鬼を家へ招待してしまった。しかし、仕方ないだろう。あそこで断れば殺されていた。

家具は必要最低限しかなく、他はキャンバスなどの画材。そんな殺風景な部屋を、興味深そうに眺めている。

一通り見て満足したのか吸血鬼はこちらへと振り返り、さて、と勝手に話し出す。

「君には感謝している。我々は呪われた存在。穢の生えたような伝承に縛られてしまう。招かれなければ、他人の家に入ることはできないのだよ。トランシルヴァニアの某伯爵と同じだな」

美しい顔に似合わず、おどけた調子で続ける。

「あの現場を見られて言い訳は出来まい。私がどんな存在なのかは……わかってるね」
冗談じみた口調のなかに、脅しが交じる。

「正体を知られたとなると、死んでもらうか同胞になってもらわなければならぬ。だ

が、私はどちらの結末も望んではいない。まあ、公子の許可なしに、不用意に仔は増やせないしな」

まだ冷静になりきれない頭に、吸血鬼の話は殆ど入ってこない。にもかかわらず相手は続ける。

「それに、何を隠そう……私は君のファンなのだよ。才能に惚れていると言ってもいい!!」

楽しそうに吸血鬼が言うには、私が夜まで大学に残って絵を描いているのを、どこからこっそり観察していたのだという。お世辞にも巧いとは言えないが、定命の者ならではの渴望が出ている。そのエネルギーに惹かれた……云々。倉庫に保管してあった作品も盗み見ていたらしい。

思い返せば、あの人と遭う夢を見ると必ず、起きると首に二つ、小さな穴があいており、げっそりと疲弊したものだ。おそらく、私の知らないところで、吸血鬼にマークされていたらしい。

だが……それを嫌だと思わない自分がいる。

11 「君の絵をまだまだ見続けたいたい私としては、それらは避けたい。殺しはもちろん、

12 吸血鬼にしてしまうと創作能力が無くなってしまいうからね」

吸血鬼になってしまうと創作能力が無くなるとは不思議な話だ。聞いたことがない。よくあるお約束通りという訳ではないのか。

そう思っている間も相手は話し続ける。

「君には知る由もないことだが、わが一族は人間から身を隠して暮らしている。数では圧倒的に負けてしまいうからね。それに、いくつもの派閥がある。なかには私のように、芸術をこよなく愛し、その庇護者となる者らもあるのだ。正体を隠し、こっそりとね。しかし君に、私の真の姿が知られたと仲間たちにバレると、私が追われる身となってしまう。それはとても面倒だ」

こちらが相槌を打つかどうかなど、お構いなしだ。

「だから私のことは誰にも言わないでいてくれると嬉しい。もし誰かに話したならば、私は君を殺さなければいけなくなる」

そんな恐ろしいことを平然と言つてのける。

「まあ、言つたところで誰も信じないと思うがな。むしろ君のほうが、頭がおかしくなつたのではないか、と心配されるだろうけどね」
そう言うとき吸血鬼は可笑しそうに目を細めた。

この状況にまだ理解が追いつか無いのだろう。話の内容は頭に入ってきて来ず、ただ吸血鬼の姿を見ていることしか出来なかった。

改めてみると不思議な人だ。吸血鬼だというのに、話すその姿は普通の人間にしか見えな。話の節々に恐ろしさが出ているはずなのだが、どこかの紳士と話しているかのような感覚を覚えてしまう。

格好もお話の中に出てくる燕尾服の吸血鬼のようなものではなく、カジュアルな普段着だ。いつの間にか、返り血も無くなっている。特殊な能力を使ったのか。

ゾツとしたが、すぐに気にならなくなってしまう。と言うのも、画材に埋もれた部屋の中に立つその姿が、ひとつの作品であるかのような錯覚を覚えてしまったためだ、目の前に居るのが恐ろしい怪物であることを忘れさせるほどに。

「綺麗だ……」

見とれていたが、つい口から漏れてしまった。

その言葉を聞いた吸血鬼は少し驚いた顔を見せた。だがそれは一瞬で、どこか嬉しいげな表情へと変化した。

「そう言ってくれるのは嬉しいな。褒められて悪い気はしない」

吸血鬼は複雑な表情を見せ、小さく呟く。

14 「わがままを許してもらえらるなら、君に絵をまだ描いて欲しい……」

案外、表情がコロコロ変わる人だと思っていると、

「うむ、綺麗だと褒めてくれたお礼だ。君の絵のモデルとなってあげよう！」

そんなことを言い出し、度肝を抜かれた。

突然の申し出に驚いて何もいえないでいると、さらに続けた。

「自分で言うのもなんだが、私の容姿は君の、絵の題材にぴったりじゃないか？」

確かに自分は男性とも女性とも取れる人物をよく題材としている。そう、いつか見たあの絵の人のような。

題材が分かるほどに自分の描いたものを知られていた。願ってもいない提案に応答しなければ。

そうは思ったのだが、口も身体も思ったように動かない。

どうやら想像以上に疲弊していたようだ。今まで耐えてきた眠気や疲れが一気に襲って来た。

上手く力が入らない。ふらつく。

「いや、これではお礼にはならないか……ならば……」

吸血鬼はまだ話し続けているが声が聞こえるだけだ。内容は頭に入っていない。

意識が遠のいていくのがわかる。

ああ、倒れる。

トス……。

「おや」

抱きとめられたようで、驚きが混じった声がする。

お礼を言わなければ。そう思ったが瞼が重い。

「……まあ、こんな時間だ。しかたない」

吸血鬼のそんな声が聞こえる。

「お礼の話はまた、君が目覚めてからだな」

やさしげな声だ。

起きたら消えてしまうんじゃないか。もう見る事が、かなわなくなってしまうのではないか。また、記憶の中でしか会えなくなってしまうのではないか。

そう思ったら、最後にもっとしつかりと見ておきたい。重い瞼を開き、吸血鬼を見る。眠気がピークなのだろう。ちゃんと見えない。ぼやける。

だが、ぼんやりとしか見えない吸血鬼に、あの人が重なる。

ああ、何で気づかなかったんだろう。

16 「そうだ……貴方は似てるんだ、あの人に。……昔見た、あの絵のなかの、あの人に……」

もう、記憶の中でしか会えない、綺麗な人に。

それに対して吸血鬼は驚いたような、ほんの少し嬉しそうな表情を見せた。

ああ、ダメだ。眠気に勝てない。

「おやすみ、——」

名前を呼ばれた気がする。母が我が子の成長を見守るような声で。あるいは、父が我が子の成長を喜ぶような……。